

人、まちを元気にする、長崎応援マガジン

# ながさき

NAGASAKI GENE  
第12号  
AUTUMN 2013



特集

# 長崎を輝かせる、 注目のコラボ。

¥150  
税込

第12号 AUTUMN 2013 2013年10月1日発行(年2回発行)

発行 ● 長崎市広報社  
〒850-8686 長崎市松町2-22  
TEL 095-829-1114

¥150  
税込



人、まちを元気にする、長崎応援マガジン

# ながさき ジーンズ!

人、まちを元気にする、長崎応援マガジン

# ながさき ジーンズ!



表紙の写真は、今回の特集で取り上げた「環境保全教育研究所」の活動のひとつである竹を利用した「そうめん流し」の際に撮影しました。「そうめん流し」は毎年恒例のイベントになっていますが、今年用意された竹をつなぎ合わせると、過去最高となる45メートルの長さ。その足場づくりは、「白木自治会」の皆さんの指導を受け、「環境保全教育研究所」の活動をサポートする長崎総合科学大学のボランティアグループ(竹取物語)のメンバーが中心になって行いました。そして、待ちに待った「そうめん流し」が始まると、勢いよくそうめんをする「学童保育 元気っ子クラブ」の子どもたち。世代を超えて交流する姿にみんな、本当に楽しそうで、取材スタッフにとっても心が和むひとときになりました。

# 環境保全教育研究所 × 学童保育元気っ子クラブ × 白木自治会



1 生月さんと「竹取物語」の学生たち。2 女子大生も、慣れた手つきでノコギリを使って竹を切り出す。3 学生たちの手ほどきを受けながら、学童保育元気っ子クラブの子どもたちが、鉄のパイプを使って竹を真っ三つに割る作業に挑戦!初めての体験に誰もが夢中の様子。4 そうめんが流れるように竹の節をハンマーで割る。この後、紙ヤスリできれいに磨いたら完成。5 学童クラブで行われた竹細工教室の様子。自治会のみなさんが、子どもたちにノコギリの使い方などを指導した。7 竹炭作りで使用する焼き窯は、自治会のみなさんと学童クラブの子どもたちと一しょに造り上げたもの。

白木自治会 会長  
小柳 伸一郎 さん

学童保育元気っ子クラブ  
指導員 角野 悠 さん



# 長崎を輝かせる、注目のコラボ。

特集  
元気なまちを育む、長崎の遺伝子



コラボレーション。それは、人と人、人と企業、人と団体などが協力し合い、新しい発想の“何か”が生まれる、素晴らしい活動のこと。長崎にも、そんなステキなコラボがたくさん存在することをご存じだろうか?今回の特集では、人と人がつながり、お互いのアイデアや得意分野を融合させることで、長崎に新しい風を吹き込もうとする注目のコラボ取材。人と人とのつながりから生まれる新しいチカラにスポットを当てた。

## 竹林整備をきっかけに始まった《へんちくりん》活動。

長崎市内には多くの竹林が存在する。しかし、繁殖力が強い竹は雑木林を侵食し、里山を荒廃させる原因になるため、その整備が急務となっている。そこで、平成22(2010)年の深堀大籠地区と田手原地区での竹林整備をきっかけに、これに関わる団体のネットワークを構築する活動がスタートした。活動の名前は《へんちくりん》。ユニークなネーミングには、竹林と、いろんな世代の人たちが出逢って変わっていく、という2つの意味が込められている。活動の中心になったのは、長崎総合科学大学の環境活動グループ《竹取物語》だ。このグループと「学童保育元気っ子クラブ」「白木自治会」「舞岳木楽堂」「長崎市社会福祉協議会」などが連携し、活動を展開していった。



環境保全教育研究所  
代表 生月 菜々子 さん

《へんちくりん》では、竹林整備を進める中で、竹を切る、使うという一連の流れを、学童クラブの子どもたちに、自然体験プログラムとして提供している。そして、子どもたちがノコギリを使って切った竹をそのまま資源として

## 学童クラブ、自治会との連携で、世代を超えた新しい交流の場を創出。

「大学時代に参加した《竹取物語》の活動を通じて、竹林整備の重要性をアピールしたい」という思いと、子どもたちと触れ合える場をつくりたいという気持ちを持っていったので、卒業後もそのまま活動を続けていくことにしたんです。せっかく築いた地域の皆さんとの絆を断ち切るのももったいないと思いましたが、そう笑顔で話すのは、「環境保全教育研究所」代表の生月菜々子さん。平成22(2010)年、大学4年生の時に、大学の教員や学生仲間10名で「環境保全教育研究所」を設立。生月さんは現在、長崎市田手原町の事務所を拠点に、田手原町をはじめ、深堀、戸石町などの竹林整備を手がけている。

生月さんの取り組みを地域の皆さんはどんな風に捉えているのか? 「学童保育元気っ子クラブ」の指導員である角野悠さんは、「生月さんには竹細工教室やそうめん流しなど、私たちの学童クラブだけではできないことをお願いします。子どもたちはとてもイキイキした表情で体験を楽しんでいますね」と語る。また、白木自治会の小柳伸一郎会長は「大学から竹林を整備しながら、学びの場をつくりたいという提案があり、いっしょに手伝うことになりました。自治会にはいろんな専門家がいますので、道具の使い方を学生や子どもたちに指導できます。助け合いが必要な今だからこそ、生月さんの活動には満足していますよ」と笑みを浮かべる。

生月さんは「私にとっては、子どもたちが真剣な顔で取り組む姿を見るのが一番嬉しいんです。自然体験を仕事にしている人はあまりいないので、今後とも経営を確立させ、他の地域にも活動の場を広げたいですね」と夢を語り、近い将来、同研究所をNPO法人化することを目指している。生月さんを中心に、学童クラブや自治会を巻き込んだコラボは、世代を超えた新しい交流の場を育み、地域コミュニティの活性化にもつながる一つのカタチと言えるだろう。